
不登校

豊武進

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不登校

【Nコード】
N8582U

【作者名】
豊武進

【あらすじ】
学校に行けない。何もする気が起きない。そんなうつの現状を描いた作品です。

「今日は学校、行くと？」

母の声が階下から聞こえてくる。僕はぼんやりする頭を震わせ、おざなりの返事を返す。

「ううん……」

もはや回答ではなく、ただの唸り声だ。自分でもそう思いながら、自嘲気味の笑みをこぼす。幼い頃からの自嘲癖は相変わらず治らない。

身体を起こし、ベッドから起き上がる。テレビやらパソコンやらのコードがとぐろを巻いている上には、プリントが何枚も舞っている。こつも散らかっていると、ただでさえ狭い部屋はますます狭く思える。

「今日学校、行くとー？」

また母の声が聞こえる。妙に間延びした声だった。多分キツチンから声を張り上げて言っているから、間延びして聞こえるのだろう。僕はドアを開けると、廊下に首だけ出して声に答える。

「……ごめん。いかない」

「……そう」

「本当に、ごめん」

そう言つと、僕は部屋に引っ込んだ。またやってしまった。自己嫌悪に駆られ、椅子に座る。いつもは心地よい椅子が、なんだか固い気がした。

「今日で三日目……か」

カレンダーは僕が学校を休んだ日を正確にカウントしてくれる。そして、差し迫った期末テストの初日についても教えてくれる。あと一週間を切った。僕は再び憂鬱な気持ちになりながら椅子に深く腰掛けた。

僕は今、不登校児だ。文科省に言わせれば、年間五十日以上

期欠席者のことを指すらしいけれど、どうでもいい話だ。僕は現在、学校に行けてないのだから。

学校に行かない間、僕は何をするかというと、することもないのでパソコンやゲーム、読書を黙々と進める。楽しさなんてどこにもない。以前「楽しい」と感じていた出来事をやってみて、少しでも快樂を得ただけだ。改めて思うが、馬鹿だな。僕って。

隣部屋の兄の携帯が起動し、アラームが鳴り響く。兄は何かもそもぞと言いつつ、アラームを停止させた。ベッドが軋む音が聞こえる。僕は思わず声を潜め、彼が部屋を出るまで息を止める。兄に、今日も学校に行っていないことを知られたくないからだ。馬鹿な話だ。帰ってくれば、わかってしまうことなのに。

「今日はいつ、行くんか？」

「いや、いかんって」

「……またか」

父と母の話し声が聞こえる。僕は耳を塞ぎ、その声を締め出そうとする。父の疲れた声をこれ以上聞きたくなかった。

学校にいても時間が立つのは遅いが、家にいるともっと遅い。僕はやることもないので、またベッドに寝転がる。折り畳み式のベッドでは、僕の脚は少しはみ出してしまふ。それだけ、僕は成長したということなのだろうか。

いや、何も成長していない。中学校の時や小学校の時、不登校になったことなんてなかったのに。何一つ問題なく、楽しく行くことができた。テストもクイズみたいで楽しかった。テストでは必ず上位に食い込んだ。そんな僕を家族は褒め称えてくれた。

それなのに、高校に入った途端に何もかもうまく立ちゆかなくなつた。部活に授業、塾にテスト。幼稚な疑問だと自分でもわかつているが、考えずにはいられない。

こんなことが将来何の役に立つんだ？

詰め込むだけ詰め込んだ英単語が、歴史の用語が、数学の方程式が。何かの役に立つとは思えない。

僕は、何をしてるんだ？

果てしない時間の浪費。そんな気持ちが拭えない。かと言って転校したり、退学したところで、行き場がないのはわかりきっている。結局僕は、一歩踏み出せないだけだ。この生活が一変するのを恐れているだけだ。

わかっていても、なお――僕は踏み出すことはできない。

教師や親は言う。

「座っているだけで、学校に行くだけでいい」と。

幼稚園児じゃないけど、僕は正直言っただけでも限界だ。椅子から転げ落ちそうになる。五十分間の授業は悠久とも思え、僕にとっては拷問のそれに他ならない。

気分がむしゃくしゃしてきた僕は、部屋と同じくちらかった机の上に置いてある、睡眠薬を水なしで飲み込む。そして、うつを改善するため処方され、溜めこんでいた薬を一気飲みする。自殺できるわけではないが、これで目が覚めたらあの世にいた、なんて文字通り夢のような話が現実になればいいのと思って、薬を余分に飲み込む。

ふらふらとベッドに倒れ込み、天井を見上げる僕は、自分が果てしなくちっぽけな存在のように思えた。

僕は……僕は誰だ？

夜空に輝くこともできぬ、ちっぽけな名もなき星々。それが僕なのではないだろうか。そこにいようがいまいが同じこと。どんなに光り輝いたとしても、さらに大きな輝きが、僕の存在を上書きするだけだ。誰もがいつの日か、僕の存在を忘れてしまう。それはとても寂しいことではあるが、同時に喜びでもある気がする。もう誰も傷つくことはないから。

では、僕が生きている意味なんてあるのだろうか。その答えは簡単。ノーだ。僕が生きて誰かのメリットになることなんてないし、僕自身メリットになるようなこともない。何のために生まれてくるかもわからず生きていかなばならない。それが生き物の宿命だと、

本で読んだことがある。

身体がだるい。もう寝てしまおう。僕は眼を瞑ると、意識を手放した。

目が覚めたのは十一時頃だった。もつと時間が早く経てばよかったのに。ため息をつき、顔を顰める。口臭がひどい。朝から何も食べていないからだろう。僕は誰もいないであろう一階へと下りるため、階段に足をかけた。

「おはよう」

母の声が響いてきて、僕はぎくりとして歩みを止める。今日はいるのか。僕は動揺を隠し小さな声で言った。

「……おはよう」

「御飯食べる？」

「いや、いい。お腹一杯だから」

本当はお腹がすいている。だけど、食べたくない。僕は食事をすることが大嫌いだ。勿論、普段は食欲を抑えることは難しいし、食感を楽しむことは好きだ。

だが、食事そのものは嫌いなのだ。何故食べなければならないのか。絶対に答えの出ない疑問ばかりを、僕は追い求めている。

ああ、馬鹿だな、僕って。

何か言おうとする母を遮るように部屋のドアを閉め、パソコンを起動させる。パソコンでやることと言えば、ネットサーフィンと墮落した現在の僕の状況を電子化された紙の上に書き出すことだけ。勉強する気なんて、これっぽっちもおきない。

僕は一体、何をしているんだ？

お気に入りのページが更新されたかどうか一通りの確認を終え、僕はキーボードに指を滑らせながら考える。

僕は何をしているんだ？

勉強をしても、それを意味のない行為としか思えない自分がいる。こうして小説を書いていても、それで食っていけるのかと問いかける自分がいる。四面楚歌。そう言うのが相応しい。かつて僕が見下

していた連中——僕より勉強ができない奴ら——が今の僕を見れば、あの秀才は何処に行ったんだと嘲笑うことだろう。

いや、そんなことはない。きつと彼らは僕のことなどなんとも思っていないだろう。そう考える方が正しい。だけど、そう考えればそう考えるほど、寂寥感を拭えない。

いつそのこと、泣くことができればいいのに。泣き喚いて、親や周囲の人に助けてもらうことができればいいのに。もしくは、発狂したっていい。精神病院に入れられたっていいから、もうこれ以上何かものを考えたくない。僕は頭を抱えて、肘をキーボードの上に落とす。衝撃でキーが押し込まれ、意味のない文字の羅列が画面に表示されていく。僕はスクロールされていく画面を見つめる。まるでそこに、僕の将来が表示されているかのように。

馬鹿なことを。僕は自分自身を嘲笑う。電腦空間に答えがあるはずなど無い。それでも僕は、居心地の良いこの空間に何かを求めてしまう。肯定もされないし否定もされないこの空間に。天国とはこのような空間のことなのかな、と思ってしまう。

ああ、いつそのこと自殺するのもいいかもしれない。どうせ、自分の人生だ。自分が精一杯生きたと思うのなら、自殺したっていいのではないかと思う。社会は僕たち自殺願望者に死ぬなど呼びかけるが、その社会が必要なのは個の僕たちではなく集団の僕たちなのだから、説得力は全くない。いつだって個の自分が必要とされてきた時代があるだろうか？ いや、あるはずがない。

死ぬのは怖くない。だけど、死ぬ前に感じる激痛が怖い。痛みが怖い。自殺した理由を後々推測されるのが怖い。だから、僕は死のうにも死ねない。あと一押しさえあれば、死ぬこともできるのだらうけれど。

目を瞑れば、僕の今までの人生の軌跡が思い出される。それらは全て怒られたこと、叱られたこと、恥をかいたこと、後悔したことばかりで、何をしたのかも克明に覚えている。時々、記憶の中の彼らは僕に死んでしまえと呼び掛けてくる。僕はそういう時、死にた

いと言う衝動を抑えきれない。

僕は義務感だけで生きてきた。そして、これからもそうだろう。義務感だけが僕を支え、僕を助けているのだから。その反面、その義務感のせいで僕は学校を退学できないし、僕は学校に行くこともできない。学校に行くことは宿題や予習ができていることが前提だからだ。

だが、僕の人生すら僕の、自分自身に対する義務感だけで生きなければならぬのだろうか？ 家族が死ぬなというから、家族に対する義務感だけでこれから生きていかなければならぬのだろうか？

僕は果てしない不安に抱かれながら、ベッドに寝転がった。

このまま死ねたらいいのと思いつながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8582u/>

不登校

2011年10月3日03時31分発行